

2015年度「読書会」

読書会について、2015年度は5回開催しました。非常勤講師の中永先生のご好意により今年度から開催されました。
第1回 (7月23日) 「舟を編む」三浦しをん著、「博士の愛した数式」小川洋子著
第2回 (8月27日) 「火花」又吉直樹著
第3回 (9月28日) 「老人と海」ヘミングウェイ著、福田恒存訳
第4回 (11月12日) 「フィンランド豊かさのメソッド」堀内都喜子著
第5回 (1月28日) 「地方消滅」増田寛也編著
選定された本も面白く、本の内容について、学生と非常勤講師等の先生と議論する機会を図書館交流プラザの一角でもっています。議論後には学生はあらためて知る喜びを感じているようでした。今後も、非常勤講師の支援をいただきながらつづけていきたいと考えております。ご参加とご支援をよろしくお願いいたします。



第4回 読書会

読書を楽しもう 米子高専読書会主宰(元鳥取県教育長) 中永 廣樹

読書は楽しい。そして、私たちが生きていく上で、読書はとても大切なものだ。ネット社会にあっても、いやネット社会であればあるほど、読書の意義は高まる。
特に若い時にする読書は、慈雨が大地にしみ込むように、若く柔らかな心や頭脳に知識、思考、情操などの豊富な栄養をもたらしてくれる。それが小さな芽を出し、枝葉をつけ、やがて大きな幹となる。米子高専は言うまでもなく、第一線で活躍する工業系技術者・研究者を育成する高等教育機関であり、教育・研究や就職などで高い評価を得ている。その米子高専で、私は非常勤講師として、教養科目である国語や文学の授業を担当している。授業では少し余った時間を利用して、短編の文学作品などの朗読(読み聞かせ)を行っている。例えば、菊池寛の「形」、芥川龍之介の「トロッコ」、横光利一の「蠅」、安部公房の「良識派」、安岡章太郎の「サアカスの馬」、三浦哲郎の「とんかつ」、鷲沢筋の「ほうずきの花束」などの小説である。ノンフィクションでは迎見庸の「もの食う人びと」も朗読する。
学生諸君の反応はとてもよい。朗読をもっとしてほしいと要望する学生もいて、理系学生という感じがしない。私にとってこうした学生諸君の反応は嬉しい。なぜかといえば、第一線の技術者・研究者として優れた仕事をする時には、専門性だけでなく、専門以外の知識や感性や豊かな人間性などが実は大きな力を持つのだが、学生諸君が人間の心の在り方や生き方といった、いわば文系的なものに関心を持っているからだ。
ところで、読書にはさまざまな形があると思う。好きな文学書をゆったりと、楽しみながらする読書。研究・調査や仕事に必要な知識・技能を得るためにする読書。日々の暮らしに役立つ読書。言葉・心・感性を高めてくれる読書。自分の生き方を考えるためにする読書。人間・社会、自然などを知り考えるためにする読書などなど…。

こうした読書を通じて、例えば、人間とはいかなる存在なのか、社会と人間、自然と人間との関わりはどうかあるべきなのか、科学技術とは人間にとって何なのか、人間の心とはそもそもいかなるものなのかなど、若い時に考えることはとても大切だ。こうして得たものはやがて教養の一つとなり、大人になって生きていく時に大きな力となる。
そういえば、昨今の大学改革(改悪?)により、日本のほとんどの大学が以前にあった教養学部・教養部を解体してしまい、入学後できるだけ早い時期から専門的な内容を学ぶようになってしまっている。歴史、人間、社会、哲学、自然、芸術、文学などといった、われわれが現代社会に生きる上で必要な幅広い教養(リベラルアーツ的なもの)が大学教育から抜け落ち、学生が身につけられなくなっているとしたら大問題だ。
そんな折、米子高専が創立五十周年を迎え、図書館が大改修されて大きく生まれ変わった。閲覧室とは別に交流プラザも設けられ、話し合いなどが自由に行えるようになった。この図書館を学生諸君には大いに活用してほしい。専門の理系の勉学はもとより、文系的な世界をも学び、教養人としての力をつけてほしい。図書館は学校の知の拠点なのだから。
おわりに、図書館の皆さんのご支援により、この図書館の交流プラザで、今年度初めて、高専読書会を5回開催した。狙いは文系的な世界の探求である。小説では芥川賞受賞の又吉直樹著「火花」、本屋大賞受賞の三浦しをん著「舟を編む」、ヘミングウェイ著「老人と海」など、ノンフィクションでは増田寛也著「地方消滅」も取り上げた。参加学生はまだ少ないが、読書会を楽しみにしてくれる人もいる。この読書会が盛んになり、いつの日か米子高専の特色の一つになることを願う。
読書は楽しい。もっと読書を楽しもう!

2015年度文化セミナー報告

2015年度の米子高専文化セミナーは、第1回が5月24日(日)、第2回が6月21日(日)、第3回が10月25日(日)、第4回が11月29日(日)に行われました。会場は、第1回と第4回が中海テレビ放送センタービル、第2回と第3回が米子高専図書館2階アカデミックシアターでした。第1回は教養教育科の川邊博先生による「アインシュタインと理論物理」、第2回は教養教育科の酒井康宏先生による「アメリカポピュラー音楽のJ-POPへの影響と音楽全般の発展について」、第3回は建築学科の山田祐司先生の「魅力あふれるイギリスの交響曲」、第4回は教養教育科の大庭経示先生の「ゲームの必勝法を見つけよう!」でした。各講師の先生方は、パワーポイントやレジユメの他に様々な小道具を持ち込んでいただいていたのでわかりやすく具体的に説明をいただいたことが印象的でした。参加者から拍手がわく場面もありました。
文化セミナーを通じて、米子高専が地域に貢献していると考えます。来年度も是非ご来場ください。



第1回文化セミナー

としよぶらり
米子高専図書館報

ISSN 1344 - 5634

第100号

平成28年2月3日 発行
米子工業高等専門学校図書館



としよぶらり
100号の発行に
寄せて

校長 齊藤 正美

本誌の発行が100号を迎え、たいへん慶ばしい限りです。前号の99号に読書と教養に関する座談記事が出ていますが、その中で少し気になる話が出ています。ある先生の、「多くの学生諸君がスマホに熱中してずいぶん時間を取られている。」との発言です。某国立大学長が入学式の挨拶で「スマホやめますか、それとも〇大生やめますか」とコメントされ随分話題となったことを思い出しました。利便性、効率

性を求める現代社会(ネット社会)にあつて、某学長のような全否定はしませんが、ネットやスマホからはきちんとした体系だった知識や情報を得ることはあまり期待できません。私が学生諸君に望むことは、しっかりとした考えや教養を身に着けた奥行きが深い、人間力に溢れた人に育ってほしいその一点です。それに必ず役立つものが、「読書」です。その考えをさらに進めて私は、本校の図書館を読書だけでなく様々な文化活動の拠点とし、ここに集うことで皆さんの教養を高めることが出来るようなセンターにしたいと考えています。図書館は大きく変わろうとしています。学生諸君の意識も是非大きく変えてください。図書館をより効果的に活用することで諸君のさらなる飛躍を期待して巻頭の言葉とします。

目次

としよぶらり100号の発行に寄せて .....1
<2015年度 校内読書感想文コンクール優秀作品発表>
最優秀賞 物質工学科 5年 小笠原宙樹 人生を変えた一冊「アルケミスト」 .....2
優秀賞 機械工学科 1年 新庄 広大 「夏の花」を読んで .....3
優秀賞 建築学科 1年 森岡 咲里 「夢をかなえるゾウ」を読んで .....4
優秀賞 電子制御工学科 2年 高津こなつ 「武道館」を読んで .....5
2015年度 校内読書感想文コンクール表彰者について(記念撮影、審査結果、本の題名及び著者) .....6
2015年度 校内読書感想文コンクールの概要と総評 .....7
2015年度 第1回高専祭講演会「ベトナム調査から見るASEAN自動車産業の今と未来」 .....7
米子工業高等専門学校図書館 学生のクエストにより購入した図書一覧(2015年度分) .....8
2015年度 第1回、第2回(ビブリオバトル)結果報告 .....9
2015年度 <ビブリオバトル山陰決戦>結果報告 .....9
2015年度 読書会報告 .....10
読書を楽しもう .....10
2015年度 米子高専文化セミナー報告 .....10

## 最優秀賞

### 人生を変えた一冊「アルケミスト」

物質工学科 5年 小笠原宙樹

自分の人生の夢は何だったのだろうか。自分はこのまま周りの多くの大人達がそうであるように、学校が薦める会社に入り、安定した生活を送り、週二日の休みのためにあくせく働くのだろうか。そんな恐怖にも似た感情を抱きながら私は進路に悩んでいた。自問自答を繰り返すうちに将来について考えることが嫌になり、終には自らの将来を放棄しようとしていた。そんな矢先、ある先輩が私に「アルケミスト」を紹介してくれた。なんでもその先輩の人生を変えた本らしいのだ。将来に悩んでいた私の心の底には藁にもすがりたい思いがあったのかもしれない。

その本は一人の少年の旅物語だった。スペインのアンダルシア平原で羊飼いの少年サンチェゴは旅の途中に「ピラミッドのそばで財宝を手に入れる」という夢を何度もみる。少年はその夢を信じていなかったが出会う人々に導かれ、アフリカへ渡り遙か遠くのピラミッドを目指す旅に出る。その道のりは決して平たんではなく、少年は多くの重大な決断を強いられる。旅を通して、「自分の運命をよむこと」を学んだ少年は夢を叶えるために立ちふさがる壁を一つずつ乗り越えていく。

私は一読した後、目を閉じ、大きく空気を吸い込み、まだ見ぬ世界の情景に思いを馳せた。私の心の中に浮かんだのは、少年サンチェゴが感じたであろう未知の世界への不安、そしてそれを圧倒的に上回る勇敢果敢な旅人への憧れだった。

私はこの作品を通して、自分の心の声に従い、未知の世界へ飛び出す勇気の重要性を改めて認識した。羊飼いと自分の馴れ親しんだ生活を捨て、心を寄せる少女への思いを諦め、自分の夢を信じ追求した少年サンチェゴ。周りの世間体を気にせず純粋無垢に旅をし、その間に学ぶ知識を受け入れ自分と向き合うことによって夢を叶えていく少年。そんな勇敢な少年に比べて私達はどうかだろうか。「常識的に考えておかしい」などと自分の思考を停止し、周りの大多数に流されてはいないだろうか。何かに強く働きかけ成し遂げようとせず、物事を自分の狭い経験で語り、誰かの情報に頼

りながら、自分で選択できる幸せを忘れてはいないだろうか。小さい頃はありとあらゆる物に興味をもち、人生において起こって欲しい全てのことは現実になると信じ、希望や憧れを抱くことに恐れなど無かったはずだ。現在の日本社会には少年のようにやりたい事をやっている人間に、必ずしも好意的な目は向けられていないように感じる。「和を以て貴しとなす」という言葉通りに実践できる人は多くなく、常識を少しでも外れている人に対してむしろ敵対的な社会になっている。そしてそのことをみんな理解しているからこそ、やりたいことをやるために進んで輪から外れないのが日本社会のように感じている。しかし、夢を追う少年にとってこの社会性は最優先事項ではない。自分が心から夢が達成されることを望めば、世界のあらゆる出来事が夢を達成する「前兆」を教えてくれる。それに従うことが重要なのだ。世界をよく観察して勇気をもって自分の心の声に従うことが大切だと、アルケミストは少年に語りかける。その点でこの作品は私達が忘れかけているものの重要性を伝えてくれているように感じる。

私は、自分の未来は自分自身が今行動することによってのみ拓かれるのだと感じた。存在するかも不確かな宝を目指して、馴れ親しんだ生活を捨て、自分の夢を純粋に追いかけることによって夢を叶えた少年。その少年のように、今の自分にできる行動を起こして多くの人の考え方や文化に触れること、そしてさらには自分の心の声に従うことで多角的に物事を見ることが出来、自身の根幹となる人格を形成できるのだと思う。多くの情報がいつでもどこからでも容易に手に入るようになった情報社会の今日、実際に経験することなく日本のみならず全世界の情報が手に入る。しかし、それだけで人格形成の軸となるような経験を得ることが出来るのだろうか。答えは否。実体験を通してこそ多くを考え、感じる事が出来るのだと思う。これからの社会に必要なのは卓上の知識だけでなく、未来への恐れに打ち勝ち、行動を起こせる力だと強く信じている。私は思う、動いたものにしか見えない景色がそこにあるのだ、と。

この本は私の人生を変える一冊となった。泣いても笑っても一度きりのこの人生、世界に広がる素晴らしいものを直接味わい、自分を深め、夢を追求する。少年サンチェゴの歩んだような、経験により成長していく旅のような人生を描いていきたい。

## 優秀賞

### 「夏の花」を読んで

機械工学科 1年 新庄 広大

今年には戦後七十年。と言われても、僕には何の事だかまったく実感がない。僕はもちろん、両親でさえ戦争を知らない世代。かろうじて祖父母が戦中生まれで、戦後の物資が乏しい時代を生きたとか、曾祖父は戦死したとか、そういう話を聞くことがあるくらいだ。

戦争という言葉から僕が想像していたのは、銃を撃って相手を倒してとか、戦車が走ったり、飛行機が爆撃したり、戦艦が海で魚雷を撃つたりとか、漫画や映画であるような、ありきたりのものだった。毎日ニュースで報道される「中学生遺体遺棄」とか「飲酒運転ひき逃げ死亡事故」とかのほうがよほど残酷で、酷いことのようにも思っていた。

戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ。それは、小学校の修学旅行で広島平和記念資料館でしっかりと見てきたはずだった。「男であるのか、女であるのか、殆ど区別もつかないほど、顔がくちゃくちゃに腫れ上がって、随って眼は糸のように細まり、唇は思いつき爛れ、それに痛々しい肢体を露出させ、虫の息で彼らは横たわっているのであった。」「人は次々に死んでいき、死骸はそのまま放ってある。」この本に書いてある表現が、修学旅行で見た情景をよみがえらせた。

キラキラノ破片ヤ 灰白色ノ燃エガラガ

ヒロビロトシタ パノラマノヨウニ

アカクヤケタダレタ

ニンゲンノ死体ノキミヨウナリズム

スベテアッタコトナノカ

アリエタコトナノカ

「見憶えのある、黄色の、半ずぼんの」自分の息子の死体を見つけ、「爪を剥ぎ、バンドを形見にとり、そこを立ち去った。涙も乾きはてた」主人公の次兄。妻の勤め先から自宅まで妻を探したが見つからず、終いには町中で道に倒れている死体を一つ一つ調べたり、収容所を訪ねまわり、三日三晩死体と火傷患者をうんざりするほど見たりしても、結局自分の妻を見つけることができなかった N。自分の親しい人の亡骸を探すということは、どんな心情なのだろう。

僕の曾祖父は中国の内陸部のある街で戦死したらしい。「らしい」というのは、日本に返ってきたのは紙切れと箱だけ。曾祖父の遺骨が入っているはずのその箱には、現地の石一つだけが入っていたからだ。一昨年、祖父母は中国へ出かけた。遺骨は見つかるはずもないが、せめて曾祖父が眠っているという中国のその地を一目見たかったからだという。七十年前の原爆よりも、はるかに量もあって、殺傷能力も高い兵器が存在する現在。もし今戦争が起これば、どれだけの人が簡単に犠牲になるのだろうか。

僕たちの世代は、「漫画や映画、ゲームの中で起こる戦いに慣れていて、撃たれても痛くないと思っているし、相手を倒すことについての罪悪感もない。命の大切さをわかっていない。リセットすればいいと思っている。」とか言われることもある。でも、そんなことは絶対ない。自分はもちろん、家族や親せき、友達や仲間が傷つけられたり、殺されたりするのなら、原爆の炎で焼かれたり、放射能で侵されたりしたら。もしかして、自分が人を傷つけたり、人を殺したり、爆弾を落としたりすることがあるのなら。そんなことが現実になる戦争が起きていいとは思わないし、ましてや自分が戦争などに行きたいとは思わない。「戦争はいけんで。」とつぶやく祖父の言葉の重さを、これまで以上に感じた。

## 優秀賞

### 「夢をかなえるゾウ」を読んで

建築学科 1年 森岡 咲里

本当は「きっかけ」なんてたくさん転がっていて、恥ずかしい思いをしたり嫌な思いをした時がそれだったのかもしれないけど、そのきっかけを僕は今までずっと素通りしてきたんだ。だからこのままでは「きっかけ」なんて来ない。それが「きっかけ」であることを決めるのは、今この瞬間の僕なんだ。

「変わりたい」と思えば、「どうせ変われない」という思いを抱いてしまい、いつまでたっても普通である会社員が、急にこんなことを考えるようになったのは、今朝目の前にいたゾウのせいである。

ただのゾウではない。たばこを吸うし、関西弁を話す。それから、あんみつが好きである。ガネーシャという、人間の体とゾウの頭、四本の腕を持ったインドの神様である。

ある朝、ガネーシャは現れた。「おい、起きろや」ガネーシャは言った。昨日、この会社員は華やかなパーティーの片隅で、誰にも声をかけず、そして誰にも声をかけられず、その場で存在自体を否定されているような感覚を味わった。成功した実業家やきれいな女たちのいる、華やかな世界に足を踏み入れたせいで、普通である自分に嫌気がさすのだった。そして、彼は酔った勢いで「変わりたい」と号泣しながら言っていた。そんな彼に、ガネーシャが「教え」を課題として出していくことになった。これが、私なりのこの本の大きな内容である。

ガネーシャの教えの中で、心を打たれたいくつかの中で、自分に必要だと思ったものをここに紹介したい。自分の苦手なことを人に聞く。自分の得意なことを人に聞く。これは、ガネーシャの教えの一つである。苦手なことを人に聞くべきであるのは、なんとなく理解できた。しかし、得意なことを人に聞くというのは、一体どういう意味なのだろうか。

「短所と長所は自分の持っている性質の表と裏になっている」という。これは、ガネーシャなりに説明すると、あんみつの長所は甘いという点で、欠点は食

べ過ぎると太るという点である。甘いのも、食べ過ぎると太るのも、あんみつに糖分があるからである。とまあ、こういうことらしい。

人には自らの欠点が支えている長所がある。それはきっと、なかなか自分では気づけない。だから、自分のことを人に聞くということが大切なのである。短所だと思っていたことが実は長所であるかもしれない。そんな勘違いばかりでは、損をしてしまう。自分のことなのに、分からないこともある。だから、変なプライドは捨て、思いきって自分を人に聞くこと。その意見を素直に聞き入れること。これができれば、人はどんどん変わっていきける。成長することができる。苦手だから聞く、得意だからこそ聞く。自分を客観視できるかどうか重要である。

この教えに心を打たれたのは、自分がなかなかできないことであるからかもしれない。

私は、幼いころから頑固であった。周りの人から「違う」とか「こうしなさい」とか言われても、すぐに「はい」と答えることができないのだ。「なぜ注意を素直に聞けないのか」と怒られることもよくあった。「はい」と言っておけば怒られず済むということも分かっていたのに、なぜかそうできないのだ。それは、自分に対する周りの意見を素直に受け入れることができないという、短所であるかもしれない。しかし、頑固であるがゆえに意地っ張りであった。習っていたピアノも、持ち前の意地で練習を続けることができた。中学の時も、執行部であったのだが、校歌の伴奏を任されていたし、他にも全校合唱の指揮や伴奏などにも挑戦した。何より意思を曲げない頑固さが、執行部として活動するうえで大いに役に立った。決めたことは絶対に成し遂げなければ気が済まないの、行事の前の長期休暇は、掲示物づくりや伴奏の練習など、時間を忘れるほど集中し、一日のほとんどを学校で過ごすこともよくあった。誰よりも働いた自信がある。

こうやって今までの自分を振り返ってみると、これが欠点に支えられた長所なのかもしれない。

人に聞いたり、振り返ったりして自分を客観視することで、新しい道が拓けてくるのかもしれない。そのために、私はもう少し周りの意見を素直に受け入れられるよう、努力するべきだと気づかされた。

## 優秀賞

### 「武道館」を読んで

電子制御工学科 2年 高津こなつ

「武道館」はアイドルである主人公の愛子がアイドルである自分と幼なじみに恋する普通の女子高生の自分という相対する自分に葛藤しつつ、アイドルグループのメンバー達と武道館でのライブを夢みて突き進んで行く話と本のあらすじにはあった。

実は、本を購入した時点で私の期待値は低かった。そもそも私は「アイドル」というものが好きじゃなかったからだ。作者である朝井リョウが好きだったから買っただけで、アイドルという言葉にはひかれなかった。むしろ可愛さだけを売りにしている「アイドル」が題材ということに対してマイナスイメージのスタートだったと思う。

しかし、読了後その考えのすべてが覆された。

まず、書かれているのは「アイドル」のことではなく、「アイドル」という職業の「人間」のことだった。特に強くそう思ったシーンがある。主人公愛子と同じアイドルグループに属する真由が、ダイエットのために茎ワカメばかり食べるシーンだ。私も一時期、ひどく体型に悩んだ時期があり、全く同じことをしていた。真由はネット上にはドーナツを食べようとしている写真を載せ、実際は茎ワカメを食べる。しかしネットのユーザー達は何も知らず、激太りしたアイドルを笑った。このシーンで、私はたまらなく苦しくなった。空腹時に茎ワカメだけをかじる辛さを知らない人達が画像という断片的な情報のみで人をばかにする。それはいわゆる「叩き」と呼ばれる行為だが、作中にはこのような描写は他にもあった。

たとえば、同じくアイドルグループの一員の波奈はアニメ好きアイドルとしてテレビに出たが、違法にあげられた動画を見ていたのがばれて叩かれた。もちろん、波奈にも非はあるが、それによって寄せられた言葉のいくつか、「違法な動画を見ていたこと」に対する言葉だったのだろうと私は思った。

この他にも、同じくアイドルグループの一員の葵や、主人公の愛子は男性との熱愛を報じられ、大きな話題となった。

作中で起こる全ての「炎上」や「叩き」に共通したのは、断片的な情報で人々が動いてしまっているというこ

とだった。そしてその情報の裏側で彼女達にどんな思いがあり、どんな努力をしていたのか知ってしまった私は、それをとても歯痒く、悲しく思った。少し想像すれば、思春期の女子が太ってしまって平気じゃないことも、アイドルでも他のアニメファンのようにアニメを楽しむ日常があることも、アイドルという立場で恋をすることにどれほどの思いが必要なのかも、分かるはずなのに、と。

しかし、それは私は読者という全てを知っている立場だからこそ思ったことであって、実際の断片的な情報を与えられる立場の時、私はどう思っていただろうと考えた。そして、この本を読む前の自分を思い返してみると、私はこう思っていた。可愛いだけを売りにしているアイドル、好きじゃない。つまり私も、「可愛くていつもヘラヘラ笑っているアイドル」というテレビやネットで与えられた断片的な情報で、アイドルという職業の「人」そのものを嫌ってしまっていた。読者という立場で“なぜ”と嫌悪した事を、自分自身がしてしまっていた事に気がついた。

情報化社会の今、私たちは「自分の知り得ない情報」を想像しなくてはならない。想像でわかることはたくさんある。そしてそれはアイドルに対してだけでなく、実際の友人関係や、ネット上での関係においても大切な事が多い。今見えて知っている情報だけでなく、知らないその人を想像すること。それはつまり小学校の道徳教育で教えられた、「人の良いところを見つけなさい」ということでもあると思った。

この本を読んで私は、なによりも想像することの大切さを再確認させられた。あらゆる手段で多くの情報が手に入る現代の人は、想像することになまけがちになってしまっているのかもしれないと考えた。しかし、そんな時代だからこそ、より想像し、相手を思いやるのが大切なのだと思う。「情報」と「想像」は一見程遠いもの同士に思えるが、この二つがそろわなくては、本当の意味で情報を生かすことはできないと思ったからだ。

私は人として、そして高専生という情報と密な関係にある存在として、もっと想像力を養いたい。そのためにこれからもっと本を読み、想像し、その末に身につけた想像力を武器に「情報」と「人」と、どちらも大切に上手に共生できれば良いと思う。それは作中の登場人物にはできなかった事だけれど、この「武道館」を読んだ人ならきっとできることだと私は信じている。



表彰式記念撮影（校長室）

## 2015年度 校内読書感想文コンクール表彰作品(読書感想文の部)

賞	学科・学年・氏名			作品名
最優秀賞	C	5	小笠原 宙樹	人生を変えた一冊「アルケミスト」
優 秀 賞	M	1	新庄 広大	「夏の花」を読んで
〃	A	1	森岡 咲里	「夢をかなえるゾウ」を読んで
〃	D	2	高津 こなつ	「武道館」を読んで
佳 作	E	1	龍田 千春	「羅生門」を読んで
〃	C	1	岡 愛香梨	「少年植村直己」を読んで
〃	C	1	加藤 有紀	「カラフル」
〃	A	1	野田 夏希	「1リットルの涙」を読んで
〃	A	1	渡下 宗太郎	「生きる」ということ
〃	M	2	會見 勇斗	「ゼツメツ少年」を読んで

## 本の題名及び著者(2015年度 読書感想文2次審査分より)

本の題名	著者	本の題名	著者
羅生門	芥川龍之介	夏の花	原 民喜
武道館	朝井リョウ	ナミヤ雑貨店の奇蹟	東野 圭吾
約束	石田 衣良	東京裁判	日暮 吉延
ジョン万次郎漂流記	井伏 鱒二	永遠の0 (ゼロ)	百田 尚樹
少年植村直己	太田 誠	プリズム	百田 尚樹
五体不満足	乙武 洋匡	モンスター	百田 尚樹
1リットルの涙: 難病と闘い続ける少女亜也の日記	木藤 亜也	舟を編む	三浦しをん
窓ぎわのトットちゃん	黒柳 徹子	夢をかなえるゾウ	水野 敬也
僕とおじいちゃんと魔法の塔	香月 日輪	ICO:霧の城	宮部みゆき
ゼツメツ少年	重松 清	カラフル	森 絵都
その日のまえに	重松 清	名のないシシヤ	山田 悠介
神の時空 —三輪の山祇—	高田 崇史	思い出のマーニー	ジョン・ロビンソン
僕は、そして僕たちはどう生きるか	梨木 香歩	ビューティフルマインド: 天才数学者の絶望と奇跡	シルヴィア・ナサー
神様のカルテ2	夏川 草介	アルジャーノンに花束を	ダニエル・キイス
硝子戸の中	夏目 漱石	アルケミスト: 夢を旅した少年	パウロ・コエーリョ
ごん狐	新美 南吉	老人と海	ヘミングウェイ

## 校内読書感想文コンクール概要と総評

図書館長 熊谷 昌彦

2015年度読書感想文コンクールは、207編の応募があり、第一通過者は34編、その中で10編が入賞となった。最優秀賞1編、優秀賞3編、佳作6編である。昨年度は196編の応募があったが、4編の増加であった。

最優秀賞のC5の小笠原宙樹さんの「人生を変えた一冊『アルケミスト』」では、「人生の分岐点に立った時、世界をよく観察して、自分の心の声に従い未知の世界へ飛び出す勇気」の大切さを訴えている。優秀賞は3作品である。D2の高津こなつさんの「『武道館』を読んで」では、「断片化した情報のもとにうまれたアイドルという虚像の裏に努力して生きている人がいること

を想像する」必要性を示している。M1の新庄広大さんの「『夏の花』を読んで」では、「漫画や映画、ゲームなどの仮想現実の世界になれている風潮のなかで、『戦争はいけんで』という祖父の言葉の重さ」を伝えている。A1の森岡咲里さんの「『夢をかなえるゾウ』を読んで」のなかで、「インドの神様であるガネーシャの教えの一つに、自分の苦手なことと得意なことを人に聞くことがある。」に共鳴している。客観的に自分を見ることが自己の成長につながるの意味を伝えているからである。佳作の6編の作品も、本を読んで、自分の今までの自分を問い直す感性が表現されていた。本を通じて私達は過去の人々の考えや現在の多くの立場の異なる人々の感性を知ることができる。来年度も、学生の本を通しての気づきや感性にであることを楽しみにしている。

## 2015年度 第1回高専祭講演会

### ベトナム調査から見るASEAN自動車産業の今と未来

京都大学大学院経済学研究科修士課程2年 松田 智也

今回の講演は二つの意図があり依頼をうけました、  
①今後エンジニアに求められることは広い視野をもつこと②工学とは異なる専門の、経済学・経営学の視点からの情報を提供することです。経済学・経営学の視点から魅力的な自動車市場である ASEAN 諸国の自動車産業をとりあげます。

まず、自動車流通の概観、次いで、ASEAN 自動車産業を取り巻く環境、最後に ASEAN 自動車産業の今後についてお話します。

自動車産業の基礎的指標として ASEAN 内の人口をみると、多い順からインドネシア2億4000万人、フィリピン9500万人、ベトナム9200万人、タイ6400万人、ミャンマー6000万人等です。五か国内では、先進国のインドネシア、タイ（、マレーシア）が ASEAN 自動車生産台数の427万台96%を生産しています。一方で後進国のフィリピン、ベトナムなどは市場が小さく、現地の部品供給企業が少ない状況にあります。タイは日系企業等の国際的生産拠点であるが、他方フィリピン等では国際競争力がなく、販売台数増加はタイ等からの輸入でまかっています。

このような状況のなかで、2018年にASEAN地域内の自由貿易協定AFTAにより、関税が0になります。したがって、現在、特にベトナムなど後進国に生産拠点を置く日系メーカーは経営戦略の見直しが求められています。政府の政策的補助が無い限り、後進国各国の自動車産業育成基盤がなくなり、現地生産撤退か完成車輸入が迫られています。逆に自国の自動車産業育成の保護政策があれば、現地生産の継続が可能になってきます。このようにASEAN各国の自動車産業の盛衰がかかっているわけです。さらに、ASEAN自体は、人口増加等の要因で急速に拡大する魅力的な市場であり、日系メーカーにとって戦略的に重視すべき市場であります。つまり、長期的に見れば撤退が良策ではないのです。このように日系メーカーにとって様々な今後の経営判断の材料があり、舵取りが難しいのです。以上のように、今後のASEAN各国の自動車産業に関する政策を踏まえ、日系企業のASEANでの今後を見守っていくことが大切だと思われれます。ご清聴ありがとうございました。

# 米子工業高等専門学校図書館 学生のクエストにより購入した図書一覧（2015年度分）

No	本の題名	著者等
1	イーロン・マスクの挑戦 ～人類を火星に移住させる	竹内 一正(監修)
2	太陽光発電アドバイザー 試験公式テキスト	SPO法人 日本住宅産業協会(著), 藤原 隆(監修), 井村 進成(監修)
3	もっと知りたい!IL-コルビュジェー生涯と作品	林 美佐(著)
4	数学の教科書が言ったこと、言わなかったこと (BERET SCIENCE)	南 みや子(著)
5	DUO 3.0	鈴木 陽一
6	A09 地球の歩き方 イタリア 2015~2016	地球の歩き方編集室(著)
7	ピケティ『21世紀の資本』を読む 一 格差と貧困の新理論 (現代思想 2015年1月臨時増刊号)	トマ・ピケティ他
8	21世紀の資本	トマ・ピケティ他
9	ハートウィグ 有機遷移金属化学(上)	John E. Hartwig(著), 小宮 三四郎(翻訳), 梅田 宗史(翻訳), 岩澤 伸治(翻訳)
10	ハートウィグ 有機遷移金属化学(下)	John E. Hartwig(著), 小宮 三四郎(翻訳), 梅田 宗史(翻訳), 岩澤 伸治(翻訳)
11	Self-Reference ENGINE(ハヤカワ文庫JA)	円城塔
12	2015-2016年版 下水道第3種技術検定試験 合格テキスト	関根 康生(著)
13	平成27年度版 マンション管理の知識	マンション管理センター(編集)
14	学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話	坪田 信貴(著)
15	日本人が知っておくべき「戦争」の話 :僕らのじっちゃん、ばっちゃんの名誉のために!	KAZUYA(著)
16	流	東山 彰良
17	火花	又吉 直樹
18	わが闘争(上) 一 民族主義的世界観	アドルフ・ヒトラー(著), 平野 一郎(翻訳), 岩瀬 隆(翻訳)
19	わが闘争(下) 一 国家社会主義運動	アドルフ・ヒトラー(著), 平野 一郎(翻訳), 岩瀬 隆(翻訳)
20	淵の王	舞城 王太郎(著)
21	さよなら妖精	米澤 穂信(著)
22	雨の塔	宮木 あや子(著)
23	火星に住むつもりかい?	伊坂 幸太郎(著)
24	パーフェクトPython (PERFECT SERIES 5)	Pythonサポーターズ(著)他
25	プログラミング Google App Engine	Dan Sanderson(著), 玉川 竜司(翻訳)
26	ハサミ男	殊能 将之(著)
27	金を払うから素手で殴らせてくれないか?	木下 古栗(著)
28	ぼくは明日、昨日のきみとデートする	七月 隆文(著)
29	オペアンプの基礎マスター	堀 桂太郎(著)
30	ぼくらの祖国	青山 繁晴(著)
31	死ぬ理由、生きる理由 一 英霊の渇く島に問う	青山 繁晴(著)
32	希望の現場 メタンハイドレート(ワニブラス)	青山 千春(著), 青山 繁晴(著)
33	海と女とメタンハイドレート ~青山千春博士ができるまで~	青山 千春(著), 青山 繁晴(著)
34	「ドイツ帝国」が世界を破滅させる 日本人への警告	エマニュエル・トッド(著), 堀 茂樹(翻訳)
35	経済政策で人は死ぬか? :公衆衛生学から見た不況対策	デヴィッド・スティーヴン(著), サウジエバ(著), 橋 明美(翻訳), 白井 美子(翻訳)
36	ストロガッツ 非線形ダイナミクスとカオス	Steven H. Strogatz(著), 田中 久隆(翻訳), 中野 隆也(翻訳), 手塚 康久(翻訳)
37	複素関数概論(数学基礎コース)	林 実樹(著), 長坂 行雄(著)
38	夢をかなえるゾウ2 ~ガネーシャと貧乏神~	水野 敬也
39	夢をかなえるゾウ3 ブラックガネーシャの教え	水野 敬也
40	MOMENT	本多 孝好
41	残虐記	桐野 夏生
42	ブレイキ	山田 悠介
43	君がいる時はいつも雨	山田 悠介
44	天使が怪獣になる前に	山田 悠介
45	ラリレ論	野田 洋次郎
46	トイレのピエタ	松永 大司
47	閃光スクランブル	加藤 シゲアキ
48	核融合エネルギー入門	ジョゼフ・ヴァイス(著) 本田 力(翻訳)
49	知っておきたい原子力発電(図解雑学)	竹田 敏一(著, 編集)
50	考証 福島原子力事故 炉心溶融・水素爆発はどう起こったか	石川 通夫(著)
51	元原発技術者が伝えたいほんとうの怖さ	小倉 志郎(著)
52	プラズマ物理・核融合	宮本 健郎(著)
53	元素変換現代版<錬金術>のフロンティア	吉田 克己(著)
54	物理学と核融合	菊池 満(著)
55	世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド	村上 春樹(著)
56	ひとりよがりものさし	坂田 和実(著)
57	絶唱	湊 かなえ(著)
58	リバーズ	湊 かなえ(著)
59	山女日記	湊 かなえ(著)
60	傘をもたない蟻たちは	加藤 シゲアキ(著)
61	慟哭	貫井 徳郎(著)

# 2015年度 第1回、第2回(ビブリオバトル)及び(ビブリオバトル山陰決戦)

2015年度にはじめて米子高専でビブリオバトルを2回開催しました。第1回目は2015年7月13日(月曜日)と第2回目は2015年12月21日(月曜日)の放課後です。両方ともに図書館の学生図書委員が中心となって企画をたて、寮の協力を得て実行できたものです。

## 第1回 ビブリオバトル選考結果

- ① E3 西尾 有輝  
「道化師の蝶」円城塔著(佳作)
- ② C1 杉本 メグ  
「ダンス・ダンス・ダンス」村上春樹著(準チャンプ本)
- ③ E4 山本 真由  
「風が強く吹いている」三浦しをん著(佳作)
- ④ A2 谷口 清美  
「学年ビリのギャルが一年で偏差値を0に上げて慶応大学に現役合格した話」坪田信貴著(佳作)
- ⑤ C5 小笠原宙樹  
「アルケミスト」パウロ・コエーリョ著(チャンプ本)

## 第2回 ビブリオバトル選考結果

- ① A4 新宮 晃平  
「深夜特急」沢木耕太郎著(佳作)
- ② D3 岡村裕太郎  
「君の臍臓をたべたい」住野よる著(佳作)
- ③ E4 山本 真由  
「秘密」東野圭吾著(佳作)
- ④ E3 仲村 和貴  
「見抜く力:リーダーは本質を見極めよ」酒巻久著(準チャンプ本)
- ⑤ D4 山根 匡翔  
「レヴオリューションNo.3」金城一紀著(チャンプ本)

表彰式終了後、河野先生よりコメントいただきました。自分の好きな本を5分間で相手に紹介する際、会場の皆さんに読んでいただきたいとの熱意や表現力が求められ、プレゼンテーションやコミュニケーション能力が試される場となったとのことでした。また、このような場を設けることを、さらに寮と図書館で協力して継続していくことへの期待もいただきました。学生には他の学生がどのようなことに関心をもっているかに興味をもっていたいただきたいと思います。

ビブリオバトルの公式ホームページ(<http://www.bibliobattle.jp/>)には、「ビブリオバトルは誰でも(小学生から大人まで)開催できる本の紹介コミュニケーションゲームです」とあります。コミュニケーションゲームであることが大切です。バトルとあるので優劣を決めるイメージがありますが、そうではありません。現在、全国の小中高、高専、大学、一般企業の研修・勉強会、図書館、書店サークル、カフェに急速にひろまりつつあります。公式ルールは以下のとおりです。

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に一人5分間で本を紹介する。
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2~3分行う。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか?」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

## ビブリオバトル山陰決戦に参加して C5 小笠原 宙樹

自分の大好きな本を紹介する。そんな大会があると聞いて、興味のままにビブリオバトルに出場した。大好きな本達の中から特別思い入れのある『アルケミスト』という1冊を選んだ。高専代表として出場した中国大会では、会場の雰囲気もよく楽しく発表することができた。自分の好きな物を誰かに伝える、そのことに普段の学会などにはない喜びを感じた。このことは非常に大事なことだと感じた。まず自分が好きな物を認識し、それについて深く理解し、人に伝え、人にもHappyになってもらう。お互いがHappyになれるBe happyなプロセスだと思った。発表後に観客の方と関わる機会もあり、普段はどのような本よんでいるのか?など談笑し、新しい興味深い本や人に出会うこともできた。この大会をきっかけに自分の好きなものをさらに追求し、人に伝えていきたい。そう感じるビブリオ大会だった。



ビブリオバトル山陰決戦で発表する小笠原君

## 「ビブリオバトル山陰決戦」結果報告 教養教育科 渡邊 健

去る2015年7月13日(月)に本校で行われた「ビブリオバトル」(知的書評合戦。詳細は<http://www.bibliobattle.jp/>参照)で本校の初代チャンプに輝いたC5小笠原宙樹君が、10月24日(土)山陰地区決戦に出場しました。会場は松江のカラコ工房で、出場者は6人。他に、鳥根県立大、鳥取大、鳥取環境大などの学生たちが来ていました。どの参加者も、自分の思い入れのある本について熱く語り、会場の観衆も思わず興奮してしまうようなバトルが繰り広げられました。

小笠原君は善戦したのですが、優勝はなりませんでした。(優勝以外は順位なし。)ビブリオバトル終了後も、会場の熱気は冷めやらず、出場者や主催者の大学生、会場での観戦者たちがいつまでも残って感想を語り合ったり、交流したりしており、小笠原君にとっては大変有意義な機会になったようです。ぜひ来年度以降も、米子高専からチャンプが山陰地区大会に参戦し、さらに全国大会に進出することを期待しています。